



■ビオトープ・サロン 生物多様性保全 ～地方創生と生物多様性～

今号は、日本型エコツーリズムを振り返り、地方創生の可能性について考えてみましょう。（編集部）

【エコツーリズムを考える（その2）～日本型エコツーリズム～】

1. 日本型エコツーリズム

エコツーリズムは、世界保全戦略の発表が契機(前号参照)となって、欧米などの旅行者がアフリカなどに観光し存分に楽しむ一方で、訪問先の自然や人々の暮らしには配慮せず、好き放題に荒らして帰ってしまう反省として、1980年代から語られ始めたと言われています。

日本でも1990年代に入って同様の動きが見られるようになり、1998年には全国的な任意団体の日本エコツーリズム推進協議会が発足、後の2003年には「NPO法人日本エコツーリズム協会」となり、環境省や地方公共団体とも連携しながら、日本における普及を図り現在に至っています。

2003年より本格的なエコツーリズムへの取り組みが始まり、環境大臣を議長とした「エコツーリズム推進会議」が立ち上げられ、エコツーリズムの概念を「自然環境や歴史文化を対象とし、それらを体験し、学ぶとともに、対象となる地域の自然環境や歴史文化の保全に責任を持つ観光の在り方」とされました。

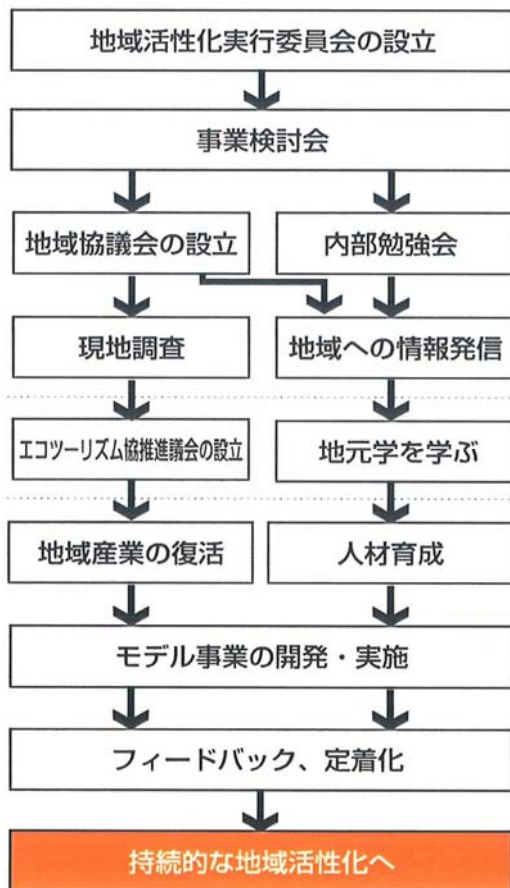
2007年に成立した「エコツーリズム推進法」においては、「自然環境の保全」「観光振興」「地域振興」「環境教育の場としての活用」を基本理念としています。そして、環境省ホームページでは、エコツーリズムを次のように紹介しています。

「私が変わる」-----自然の美しさ・奥深さに気づき自然を愛する心が芽生え、地球環境問題や環境保全に関する行動につながっていく。

「地域が変わる」-----地域固有の魅力を見直すことで、地元自信と誇りを持ち生き生きとした地域になる。

「そしてみんなが変わる」---私たちの自然や文化を守り未来への遺産として引き継いで活力ある持続的な地域となる。

まさに今、私たちが、未来のためにできる取り組みのひとつです。（環境省ホームページより）



出典：NPO法人エコツーリズムセンターHP

2. 日本型は地域活性化が主流か！？

左の図は、NPO法人エコツーリズムセンターが推進する「エコツーリズムを活用した地域活性化のためのワークフロー例」の抜粋ですが、やはり、「自然環境の保全」が主流では推進が難しい現実がうかがえます。

自然環境の保全のためには、地域振興で牽引しなければインセンティブが働かず、モチベーションの維持向上にもつながらないということでしょうか？

グリーンツーリズム、アグリツーリズム、ブルーツーリズム、グリーンツアー、エコツアー、スタディツアーと、カタカナ名が氾濫気味ですが、いずれも、わが日本では、「花より団子」ということかもしれません。

3. 地方創生への展開

地方創生という政策が推進される中で、観光振興を地方創生へとつなげる取り組みも展開されています。こうした中で近年着目されているがDMOです。これは、観光地の観光振興でマーケティング機能を担うとともに、地域の主体者をマネジメントしていく、「行政と民間が一体となった組織」のことで、欧米で先行して作られたものです。

このような組織の実用性・実効性が認識される中、日本政府も地域でのDMOの組織化に注目しており、地方創生の政策パッケージにも「日本版DMO」の創設が提唱されました。

エコツーリズムの普及やエコツアーの推進においても、「自然環境保全版DMO」の創設が地方創生と生物多様性保全をつなぐ鍵となるように思います。いずれにしても、「環境保全と地域振興の調和」、バランスを大切にしたいものです。

■みんなの“たからもの” 踏み固めないで！…木の根の周りはセミの大切な棲み処です

地中の生活が長いセミですが、田舎には当たり前だったニイゼミやミンミンゼミが減少しているようです。一方、クマゼミが増えているそうです。この現象は、地面の固さが要因の一つと言われています。卵から孵化した幼虫は、いち早く地面に潜らなければなりません。ニイゼミは固い地面は苦手で潜れないままに干からびたり、捕食されたりしてしまうようです。一方、クマゼミは固い地面でも平気で、都市化の指標にもなっています。(編集部)



【セミの棲み処を壊しちゃった：Mさん】2016.10.19
台風で傾いたビワの木が家の屋根を壊しそうなので、やむなく伐採してもらいました。

根の下を見ると小さな穴がたくさん開いていました。覗いてみると、セミの幼虫があちらこちらに。

かわいそうなことをしてしまいましたが、既に手遅れです。新しい棲み処に辿り着けることを祈りつつ、そっと埋め戻してもらいました。

我が家では、年々セミの声が増えているような気がします。数年前には久々にニイゼミの声を聴きました。



■ビオトープ・セミナー 資格試験に挑戦して基礎知識を修得しよう！

ビオトープ管理士資格試験過去問題 出展：(財)日本生態系協会主催「ビオトープ管理士セミナー」のテキストより
無断転載禁止：本紙は公益財団法人日本生態系協会の許可を得て転載しています。(編集部)

【1級計画部門の記述問題：解説は次号で紹介】

問 096：あなたが活動している地域で、市民が参加するビオトープづくりを想定し、作業中に遭遇する可能性のある危険な生物の種名を具体的にあげ、その対処方法を、400字以内で述べなさい。

■前号 095 (施工部門の択一問題) の正答 [4]

野生生物保護に配慮した雑木林管理は、①雑木林の林床管理に際しては、定期的な草刈により開けた空間を作り出すことで、多くの植物や昆虫類の生息環境を維持することは重要ですが、一方では低木などが**繁茂した数を残す**ことで、ウグイスなどの小鳥類の生息環境を確保することも重要です。②市民参加型の雑木林管理として、雑木林の中に大勢の人が頻繁に入るとは、森林土壌が踏圧されるので、**作業規模に応じた人数や回数で計画的に実施**する必要があります。③**枯れ木、倒木を部分的に残す**ことで、コゲラなどのキツキ類や多くの昆虫、菌類の生息環境を確保するという考えも重要です。④巨木や老齢木は、希少な樹洞性コウモリが生息環境として利用することも稀にあるため**保存に努める**こととし、定期的に点検して、倒壊により人身に被害が及ぶことが無いように**立ち入りを制限**し、周知を図る。⑤雑木林だけに管理の視点を限定することなく、行動圏の広いオオタカなどの猛禽類、複数のビオトープを利用する両生類や昆虫類などの生息環境保全のために、周囲に存在する河川、池沼、草地などをも含めた**広域的視点**で、管理を行うことが重要です。このように専門家の指導により**生態系を十分に理解**したうえで実施することが大切です。

2級はどなたでも受験できます。四国の会場は徳島でしたが、徳島会場は28年度が最後かもしれません。**次年度の受験案内にご注意**ください。詳しくは、<http://www.ecosys.or.jp/> (公益財団法人 日本生態系協会HP)

■編集後記

ビオトープに関するお役立ち情報はもとより、皆様の生活や活動やお仕事等、日常を通じて見たり感じたりしたこと、身近な自然の春夏秋冬や喜怒哀楽のご寄稿をお待ちしております。ふるってご参加ください！ 編集部
【ご意見・お問い合わせは E-mail: kanv@nifty.com へ】 【バックナンバーは URL: <http://biotopetokushima.yu-yake.com> から】